

report

事例レポート ①

地域に根ざした農業の 展開方向と食文化

一般社団法人オホーツク・テロワール

地域の風土に根ざして持続できる多様な農業を行いながら、現代の流通には乗りにくい地場で埋もれている生産物を質の高い商品にして発信していこうとする活動が、オホーツク地域で始まっている。地方の隅々まで画一化した市場経済と折り合いをつけながら、改めて地域固有の経済を浮き上がらせることは、想像以上に大変な作業を伴う。活動の中心となっているのは一般社団法人オホーツク・テロワール。地域の農業商工業者などがメンバーになっている。

都市への人口流出で荒廃していた農村を、伝統的な農業の復活と厳しい基準に守られた価値ある食（チーズなど）の市場提供によって、50年かけて再興してきたフランスの自然公園制度に参加した小さな農村ボッフォー村の経済活動に範をとっている。

食が由来する地域固有の土地や風土を意味する「テロワール」というフランス語をあえて名前に冠して活動している団体の大黒宏理事長と古谷一夫理事に、土地や風土にこだわる現代的な意味合いや地域再生への思いについて、お話をうかがいました。



一般社団法人オホーツク・テロワール
理事長 大黒 宏さん

理事 古谷 一夫さん

ボッフォー村との出会いと気づき

私たちの活動のきっかけは、フランスの小さな農村、ボッフォー村との出会いでした。2006年秋に、フランスアルプス（南フランス）の麓にあるボッフォー村を視察しました。

フランスではおよそ50年前、現在の北海道のように、パリへの人口の一極集中が起こり、農村が疲弊していました。フランスは、もともとヨーロッパ最大の農業国で、農村が疲弊している現状に相当な危機感を抱いて、国策として農村への人口定住を進めていきました。その中心となったのが、農村の伝統的な文化遺産を守りながら、地域経済も再生させる「地方自然公園制度^{*1}」の取り組みでした。

ボッフォー村も地方自然公園制度に参加し、酪農業と農村ツーリズムや山岳スキーなどの観光で成り立っています。人口は2,000人程度の中山間の村で、標高800mから2,500mの山岳高地での放牧酪農が1000年以上にわたって行われていて、「AOC^{*2}」という地域認証を受けた国内でも人気の高いブランドチーズを生産しています。

夏は標高1,700mほどの高地で牛は放牧され、そこで搾乳されたものが毎日、下の村から集乳車が来て協同組合のチーズ工場へ運んで加工されています。高山植物を食んだ牛が生産する生乳は花の香りがして、夏季のチーズは非常に高価になります。

歴史的な建築物でもある農家群は農村観光を支える美的な景観観光の主要な構成要素になっていて、斜面に整然と並ぶ農家の切妻の屋根は角度が決められていて、しかも切妻の正面が谷を向いているのが原則です。これは下から牛を入れて、後ろから牧草を入れたから、そういうふうになっているのです。



※1 地方自然公園制度（仏：Parc Naturel Régional）
フランスの地方自然公園。略称「PNR」。産業の質が向上することにより、質の高い景観が生まれ、質の高い生活・観光資源が生まれると考えられたもの。フランス国内で46カ所、国土面積の13%以上にもなる700万haが指定されている。

※2 AOC（仏：Appellation d'Origine Contrôlée）
原産地統制呼称。優れた農産物、酪農品に与えられる認証。産地の個性や栽培に関する伝統的ノウハウや品質を規定。

バスでボッフォー村に入り、昔ながらの山岳酪農を目の当たりにしたとき、強い衝撃を受けました。標高の高いアルプスの麓の谷間に凜として立つ村の姿が、私たちの目指すべき方向性を感じさせてくれました。これが、「気づき」というものだと思います。

オホーツク・テロワール発動

テロワールという概念は、平易に言うとう食が育まれる「土地・風土」ということですが、AOCで認証される要件のなかに、地域の歴史や自然価値などとともに非常に重要な要素になっています。

私たちが持続的な経済活動を行っていかうとするなかで、時代と地域が共有できるキーワードとなる言葉として使っていきたいと思っています。

オホーツクのテロワールを模索し、形作っていくことがこれからの本質的な作業になります。

ボッフォーではAOCによって産物、商品の基準が厳しく決められています。オホーツク・テロワールでも将来はきちんとした基準、認証制度を確立させたいと思っています。現在は、自然を守る農業ということで、有機栽培とそれに準じた特別栽培を最低限の基準として設けています。加工品に関しては、塩、砂糖など基本的な調味料以外は食品添加物を入れないということで検討しています。

見える形にする実験ショップ「テロワールの店」

私たちの活動を、理念だけではなくて具体的に見える形として実験する店として「オホーツク・テロワールの店」を始めました。小規模零細でやっていて、作っても売る場所がない、売り方がわからない、ど



「オホーツク・テロワールの店」の商品たち

こに持って行っていいかわからない、ということに対応した実験ショップとしてテロワールの店が機能しています。

テロワールの店は、現在、美幌町のコープさっぽろ美幌店に実店舗を出店するとともに、インターネットショップも開設しています。商品数は農産物だけではなく海産物などの加工品も含めて200~300点はあります。

くり豆という豆をテロワールの店で扱っています。網走では美幌町周辺と十勝では本別町周辺で一部の農家が伝統的に受け継いで栽培されてきた、いわゆる「地豆」です。そのくり豆が、周辺からおいしいという評判が伝わり、美幌町内の飲食店でもコース料理のデザートとして使われるようになりました。現在では、美幌の農家が少しずつ栽培を広げるようにしていて、貴重なオホーツクの「食の遺産」となっているものです。

私たち自らが地域商品として掘り起こそうとしているものもあります。大きな芋と一緒に掘り出される「グルナイユ」というちび芋ですが、煮物にすると濃厚な甘みがあっておいしいのです。テロワールの店の中心的な食材として取り上げていきたいと思っています。まさにテロワールの発掘です。

そして、規格外ニンジンです。野菜の中で一番規格が厳しくて市場に出る率が少ないのがニンジンだと聞いています。店に置くと、煮物を作った人が何度も足を運んで買いに来てくれました。

生産者からの持ち込みもあります。一応特別栽培以上のものや添加物を入れないものであることを基準にお話を聞いています。

肉牛の肥育農家が持ち込んでくださったなかに、牛のウィンナーソーセージと牛のフランクソーセージがありました。なかなか世の中のでていない商品なので、添加物を入れない方向で店に置けるように相談をさせていただいています。

大規模生産と大規模流通、大規模消費の間で取り扱われなくなった産物、埋ずもれているものはたくさん

あります。そうしたものを小さな流通を作り出して売っていく場として、テロワールの店があります。

テロワールの実践活動「街なかマルシェ」

テロワールを普及させる実践的活動として、「オホーツク街なかマルシェ」という活動を各地で行っています。興部町で開催した街なかマルシェでは商店街で閉鎖している店舗を一年に一回は開けて、市場にするのです。店の奥まで行ったらスタンプを押してくれるという仕掛けで、これまで入ったこともない店に足を踏み入れてもらいます。町に住んでいる人でも入ったことのない店がたくさんあって、スタンプをもらいに奥まで入ってみると意外な感動や発見をしたりするのです。普段は人っ子一人動かない街が、とんでもなく人であふれて動いています。

「何年か前に高知市を訪問し、日曜市に驚かされました。高知城から1.5kmにもわたって道の両側にテント市が立っています。300年も前から続いています。そこで山から大根を売りに来ているおじいちゃん、おばあちゃんに出会ったのですが、山間部の家庭菜園程度の畑で入川内大根という在来種の大根を作っている。不ぞろいの大根で農協も相手にしないものが、日曜市があるおかげで、地域ですっと買われていく。そして、売れたお金でおじいちゃん、おばあちゃんは1週間分の買い物をして帰っていくのです。定年退職する息子夫婦がもうすぐ帰ってきて引き継いでくれると言っていました。オホーツク・テロワールの店、オホーツク街なかマルシェの実験的な活動も、この高知のテント市と在来種大根づくりの話と同じで、目標はオホーツク地域独自の経済を具体化する永続的な活動にしたいという思いからです」と大黒さん。

農業政策と農村政策のミスマッチに危機感

古谷さんは言います。私は清里町でまちづくりの仕事をずっとやってきて、気になっていたことがありました。農業は大規模農業を進めて、年間粗収入で3,000万円を超えるような状況をつくりあげたのに、人口は減っていく。家族を持って親父になっても、農業の現

場では組合勘定に縛られ、公務員以上にサラリーマン化。「組織や制度の枠組みの中での農業」という循環にだんだんと落ち込んでいく人もいます。奥さんは「こんなものを求めたんじゃないかった」と。結果、地域で子供たちが見ているものは何かと言うと、「主体的に地域農業に向き合うことの意味を見い出せない大人」や「消えていく自分の通う学校」です。家庭が変容し、地域が変容しているのに、それにさえ気付かないで鈍感になっていく。さらに深刻な問題があります。大規模農業が進む中で、多大な税金を投入して整備した農地が個人資産化する。地域資産として継承していかなければいけない農業資産が個人資産としか意識されなくなっていて、議論が矮小化^{わいしょう}しています。農業政策と農村政策のミスマッチを地域自らが乗り越え、本来の地域資産として次の世代にいかにか継承していくべきかという方向へ話を広げていかなければいけないといけません。

農業を地域資産として次の世代に継承していくけん引役に

大黒さんは最後に、「TPPの議論が進む中で、生産性の低い道外酪農業を保護するために生産性の高い北海道酪農業に足かせをはめてきた酪農振興政策を見直していかないと、外に立ち向かっていけないと思っています。大規模化一辺倒で離農問題などを吸収してきましたが、それも限界にきています。父親から酪農業を継いだときに、自分の町で自分が搾^{しぼ}った牛乳が飲めないことを疑問に思って、乳業メーカーの許可を取ることに奔走^{ほんそう}して、酪農生産と乳業メーカーとしてこれまでやってきました。私が入り組んできたものも、今までの枠組みだけでは解決していくことが難しい問題を抱えるようになっていきます。これからは、オホーツクという地域の中で農業を地域資産として捉え、いろいろな矛盾を解きほぐし、次の世代に引き継いでいけるように模索していかなければいけないと思っています。オホーツク・テロワールは、それを地域みんなで考えて実践していくけん引役になりたい」と決意を語ってくれました。